

館林市埋蔵文化財発掘調査報告書 第43集

館林市内遺跡発掘調査報告書

— 平成18年度各種開発に伴う埋蔵文化財調査 —

中堤遺跡 (平18地点)

北小袋遺跡 (平18地点)

子ノ神1遺跡 (平18地点)

八方遺跡 (平18地点)

2006

館林市教育委員会

館林市埋蔵文化財発掘調査報告書 第43集

館林市内遺跡発掘調査報告書

— 平成18年度各種開発に伴う埋蔵文化財調査 —

中堤遺跡 (平18地点)

北小袋遺跡 (平18地点)

子ノ神 1 遺跡 (平18地点)

八方遺跡 (平18地点)

2 0 0 6

館林市教育委員会

例 言

1. 本書は、平成18年度に国宝重要文化財等保存整備事業費補助金、群馬県文化財保存事業費補助金を受けて実施した館林市内遺跡発掘調査の埋蔵文化財発掘調査報告書である。
2. 本書において報告する遺跡名は、「遺跡台帳」に基づき次のとおりである。地点名は、平成18年度の調査であることから、「平成18年度地点」とする。

なかつつみ 中堤遺跡 きたこぶくろ 北小袋遺跡 ねのかみいち 子ノ神1遺跡 はちがた 八方遺跡

3. 調査組織は次のとおりである。

調査主体者	館林市教育委員会		
担当課	文化振興課		
調査組織	教育長	大塚	文男
	教育次長	齊藤	良雄
	文化振興課長	菅沼	道雄
	文化財係長	岡屋	英治
	主査(学芸員)	阿部	弥生
	主査(学芸員)	原	幸恵
	主任	荒川	博一
	主事	佐藤	美貴
	主事(学芸員)	吉田	紋乃
	主事(学芸員)	吉村	昭和
	調査作業員		

4. 調査作業員は、館林市教育委員会で雇用した。
5. 出土遺物、調査記録及び資料は、館林市教育委員会で保管している。
6. 本書の編集・執筆については、荒川、吉村が中心となり行った。
7. 調査の実施および本書刊行にあたり、下記の諸氏諸機関のご協力を頂いた。ここに記して感謝申しあげる次第である。(順不同)

館林市都市建設部都市計画課 群馬県東部県民局館林土木事務所 地権者各位

凡 例

1. 本書における挿図の縮尺は、図中に記した。
2. 遺跡位置図は、館林市都市計画図($S = 1/10000$)を $1/5000$ に拡大し用いた。なお遺跡位置図中のスクリーンパターン  は遺跡地、 は調査地を示している。
3. トレンチ図は、館林市道路台帳 ($S = 1/1000$) を用いた。
なおトレンチ図中のスクリーンパターン  は遺構を示している。

目 次

例 言	1
凡 例	2
目 次	3
挿図目次	4
写真図版目次	4
第1章 館林市の環境	5
1. 地理的環境	5
2. 歴史的環境	5
第2章 調査の概要	8
1. 中堤遺跡	8
2. 北小袋遺跡	10
3. 子ノ神1遺跡	12
4. 八方遺跡	14
参考文献	16
写真図版	17
報告書抄録	21

挿図目次

第1図	館林市の位置	5
第2図	館林市の地形概念図	7
第3図	平成18年度調査遺跡の位置	7
第4図	中堤遺跡	8
第5図	トレンチ配置図	9
第6図	北小袋遺跡	10
第7図	トレンチ配置図	11
第8図	子ノ神1遺跡	12
第9図	トレンチ配置図	13
第10図	八方遺跡	14
第11図	トレンチ配置図	15

写真図版目次

写真図版1 (中堤遺跡)17	写真図版3 (子ノ神1遺跡)19
1-1 調査地 (北より)	3-1 調査地 (南より)
1-2 重機掘削	3-2 作業風景
1-3 2トレンチ (東より)	3-3 重機掘削
1-4 4トレンチ (東より)	3-4 1トレンチ (南より)
1-5 7トレンチ (東より)	3-5 5トレンチ (南より)
1-6 8トレンチ (東より)	3-6 9トレンチ (南より)
1-7 10トレンチ (東より)	3-7 10トレンチ (南より)
1-8 14トレンチ (東より)	3-8 12トレンチ (南より)
写真図版2 (北小袋遺跡)18	写真図版4 (八方遺跡)20
2-1 調査地 (北より)	4-1 調査地 (西より)
2-2 重機掘削	4-2 作業風景
2-3 作業風景	4-3 1トレンチ (南より)
2-4 1トレンチ (北より)	4-4 3トレンチ (東より)
2-5 2トレンチ (北より)	4-5 2トレンチ (東より)
2-6 2トレンチ土壌1・土壌2 (西より)	4-6 2トレンチ (西より)
2-7 2トレンチ土壌3 (西より)	
2-8 重機埋戻	

第1章 館林市の環境

1. 地理的環境



第1図 館林市の位置

館林市は、群馬県の南東部、関東地方のほぼ中央部に位置する人口約8万人の都市である。市域は東西約15.5km、南北約8.0kmと東西に長く、総面積は約60km²である。北は渡良瀬川を隔てて栃木県に、東は邑楽郡板倉町に、南は谷田川を隔てて邑楽郡明和町に接する。明和町の南には利根川が東流し、群馬県と埼玉県の県境となっている。県庁所在地の前橋市までは約50km、東京（台東区浅草）へは約65kmの距離にあり、首都圏との結びつきも強い。群馬県東南部は、「邑楽・館林」地域と呼ばれ、群馬県の中では低地に位置している。

館林市の標高は、15m台（大島町東部）から33m台（高根町）であり、おおむね平坦であるといえる。本市の地形を概観すると、「低台地」と「低地帯」に分けることができる。市域中央部に「低台地」が東西に延びるように所在し、その周辺に「低地帯」が広がる。

この「低台地」は、「邑楽・館林台地」と呼ばれる洪積台地であり、太田市高林から本市中央部を東西に延び、隣接する板倉町まで続いている。また、大泉町古海から本市高根に至る台地の北側に沿って、日本最古の砂丘の一つである内陸河畔砂丘が走っており、本市最高標高点はこの上にある。

「低地帯」は、おもに利根川や渡良瀬川によって形成された沖積低地である。台地北側の低地帯には、旧河道、微高地や自然堤防が目立ち、一方、台地南側の低地帯では、茂林寺沼など大小の沼や湿地帯が形成されている。こうした台地や低地などからなる本市の地形は、北西から南東へ向かって緩く傾斜する傾向が見られ、台地面と低地面の比高差も北部で大きく南部では小さくなっている。「邑楽・館林台地」と呼ばれる洪積台地は、沖積低地から延びる多くの谷地により樹枝状に開析されている。そのなかでも市内最大の谷は、本市中央部を東流する鶴生田川および城沼にかけての谷で、台地を南北に二分している。こうした洪積台地を開析する谷には、他にも茂林寺沼、蛇沼、近藤沼などの池沼を伴うものが多く、本市景観の特徴のひとつになっている。

2. 歴史的環境

館林市内に所在する遺跡は、145ヶ所である。昭和63（1988）年刊行の『館林市の遺跡』（市内遺跡詳細分布調査報告書）には、そのうちの144ヶ所について詳細が報告されている。

分布調査による採集遺物から大別した、各時代の遺跡数は次のとおりである。

旧石器時代の遺跡3遺跡、縄文時代の遺跡13遺跡（縄文土器のみ採取できた遺跡）、弥生時代の遺跡は0（弥生時代の遺物を採取できた遺跡1遺跡）、古墳時代～平安時代の遺跡（土師器の出土した遺跡）96遺跡（うち縄文時代の遺物も採取できる遺跡は23遺跡）、古墳は17遺跡（古墳総数25基）、中世生産址1遺跡、中世城館址12遺跡、近世城館址2遺跡である。（ただし、複合した時代の遺物散布地が見られるため、その中心になると考え

られる時代でまとめたものである。)

これらの遺跡の分布は、地形的な特徴と大きく関わっていることが観察される。館林市内に所在する遺跡の時代の変遷と地形的な関わりを概略してみると、次のようになる。

《旧石器時代》

この時代の遺跡は、市内の標高の高い地域に集中する傾向を見せる。邑楽・館林台地の北西に沿って、鞍掛山脈と地元で呼ばれる内陸河畔砂丘（自然堤防）上に、その多くが確認されている。

《縄文時代》

この時代になると、遺跡数が増えるとともに洪積台地上に営まれるようになる。前期や中期の遺跡は、池沼や谷地を望む舌状台地上の平坦面に確認されることが多い。後期以降は遺跡数は減少し、その所在は、台地の斜面から微高地に移る傾向がある。後・晩期の包含層等は低地（沖積地）におよぶ。

《弥生時代》

弥生時代の遺跡として確認されたものはないが、微高地や台地の斜面等で、遺物などがわずかに確認されている。

《古墳時代》

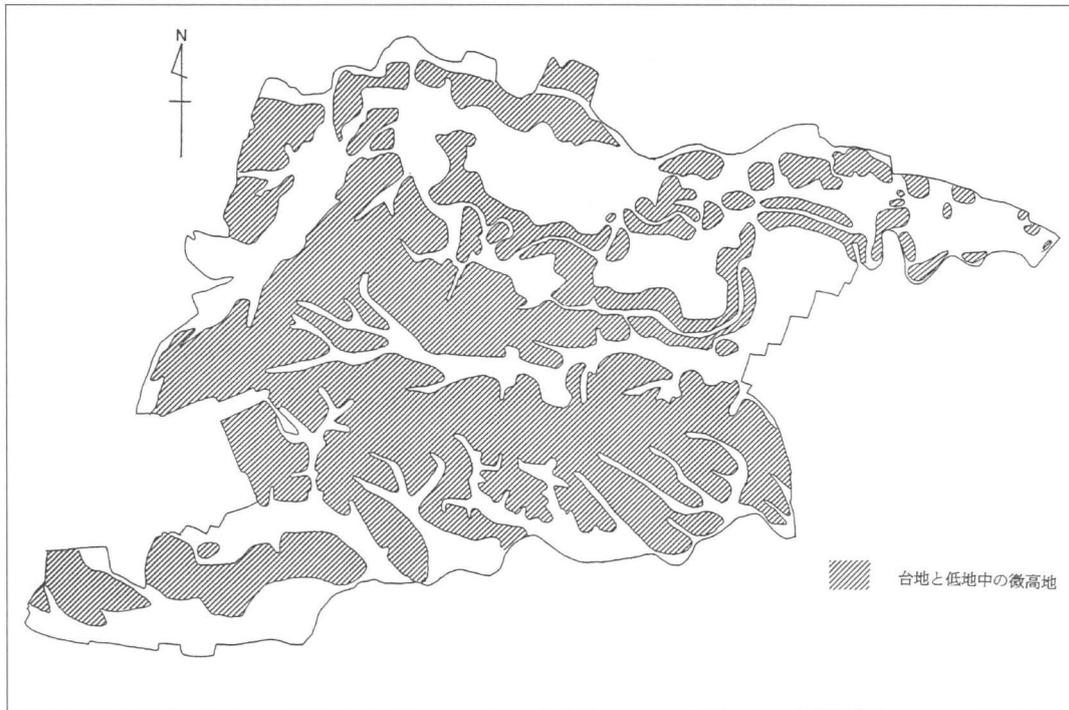
前期の遺跡は少ない。遺跡は、洪積台地の斜面からテラス状の微高地に所在することが多く、この傾向は、弥生時代の遺物散布に似ている。中期には、遺跡の数が増えるとともに、その所在は、台地の斜面から台地上の平坦面へと移行する。後期には、遺跡数は増大し、台地上の平坦部に所在する場合が多い。墳墓としての古墳は、25基が残存している。古墳群が2ヶ所あり、一つは日向地区を中心とする邑楽・館林台地上、もう一つは高根地区を中心とする内陸河畔砂丘上にある。その他単独のものも多いが、そのいずれもが、谷や谷地等を見おろす洪積台地上に所在している。

《奈良・平安時代》

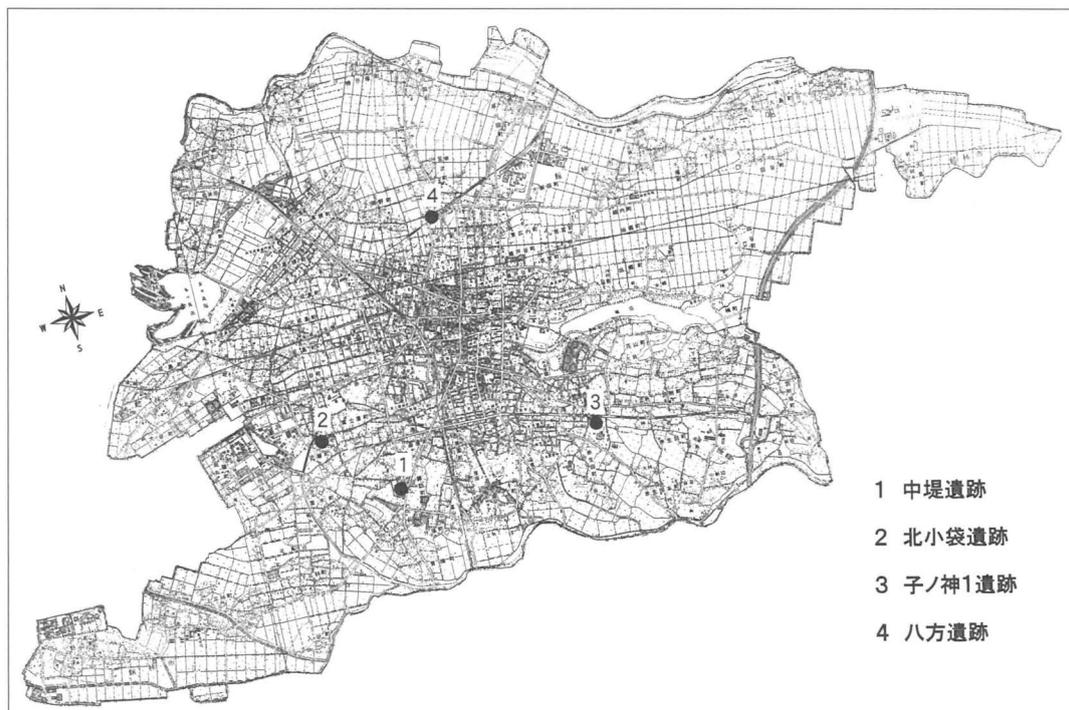
この時代の遺跡は急増する。台地の内部や全面で遺物の採取ができることから、この時代以降は台地上に普遍的に集落等が営まれてきたことを示唆している。

《中世・近世》

この時代の城館址については、伝説的な要素が多く実体ははっきりしないが、中世末には館林城が築かれ、現在の館林市の基礎となった。



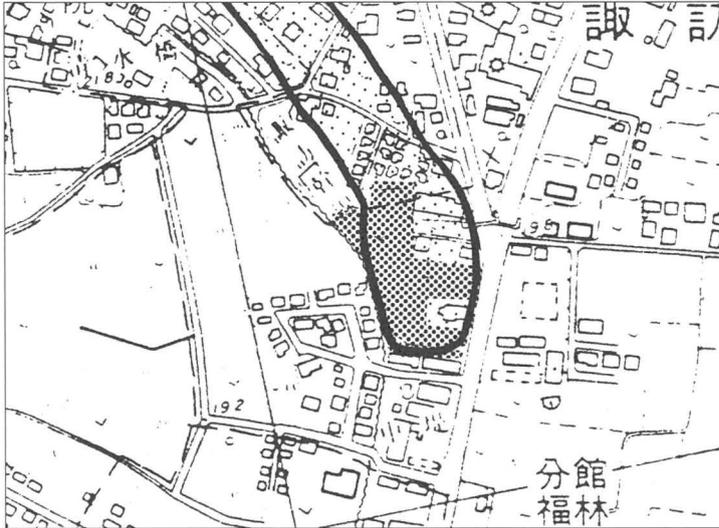
第2図 館林市の地形概念図



第3図 平成18年度調査遺跡の位置

第2章 調査の概要

1. 中堤遺跡



第4図 中堤遺跡 (1:5000)

所在地

館林市諏訪町字中堤1448-1、1448-4、
1451-2、1452、1453、1454、甲1455、1455-2、
1456-1、1456-2、1457、1458-1、1458-3、
1458-4、1459-1、1460-1

調査原因 大型店舗建設

調査期間

平成18年5月17日～6月10日

調査面積 7,206.17m²

遺跡周辺の環境

中堤遺跡は、本市の南部、旧東沼から北西方向へ邑楽・館林台地を開析する3本の谷のうち、中央の谷を南に望む台地上に広がる遺跡で、平安時代の遺物を散布する包蔵地である。

本遺跡の周辺は、国道122号線に沿って開発の進んでいる地域で、台地上では多少田園風景が残るものの、東沼をはじめとする谷部のほとんどは埋め立てられ、既に宅地化している。

周辺の遺跡としては、大塚遺跡、清水橋遺跡、青柳中島遺跡、萩原遺跡といった平安時代を中心とする遺跡が分布するほか、南方には中世城館址の伝承地である青柳城跡が、また西方には近世の近藤陣屋跡（伝承地）が所在し、古代末から中近世を中心に人間生活の痕跡が見られる。

今回の調査地は、台地の縁辺に沿って東西に広がる遺跡の南東端にあたり、国道122号線に隣接している。本遺跡では過去に2箇所調査例があるが、遺構等は発見されていない。

調査の概要

中堤遺跡（平18地点）の発掘調査は、工事予定区域の地形に合わせ、東西方向に14本のトレンチを設定し、土木重機により表土排除を行った。表土以下の土は土層断面の観察を行いつつ人力で掘り下げ、遺構・遺物の確認・検出を行った。

調査区域において現地表面からローム層までの深度は、1トレンチ付近で20～30cm、中ほどの8トレンチ付近で20～50cm、14トレンチ付近で15～80cm程で、南方方向へ幾分傾きがみられるとともに、8トレンチの東西方向の比高差は35cm程あった。また、多くのトレンチで西端部分から地下水の湧出が見られた。

遺構としては、4トレンチ東端で時期不明の井戸址1基を確認したほか、各トレンチにおいて時期不明の土壇や溝状の落ち込みが検出された。8トレンチと14トレンチの平面精査において掘り込みが見られたため、サブトレンチを設定し遺構確認を行ったが、近年において掘削された跡であることが判明した。ローム面までの深度が浅いため至る所で攪乱や重機等で掘削されたような痕跡が見られ、直接生活に結びつくような遺構等は確認できなかった。

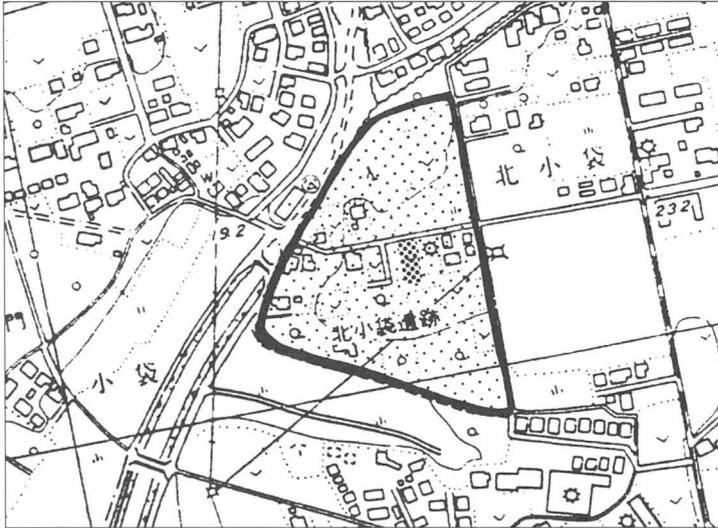
出土遺物は、表土中で細かい土師器片や陶磁器片が、ローム層付近では縄文時代の土器片や石錐が検出された。井戸址からは礫が3点出土している。

今回の調査では、保存の対象となる遺構等の確認はできなかったことから、調査区域における開発行為に対して埋蔵文化財への影響はないものと判断した。



第5図 トレンチ配置図（1：1000）

2. 北小袋遺跡



第6図 北小袋遺跡 (1:5000)

所在地

館林市近藤町字北小袋171-111

調査原因 個人住宅建設

調査期間

平成18年11月6日～11月16日

調査面積 314.05m²

遺跡周辺の環境

北小袋遺跡は、東武鉄道小泉線「成島」駅の南方約1.5kmに位置し、近藤沼より北方に延びる谷の最上流部、東より谷に張り出した広い舌状の台地の上に所在する縄文時代の包蔵地である。

この舌状台地は、幅300m、長さ700m、谷との比高差は2.8m程あり、遺跡はこの台地の先端部に広がっている。今回の調査地はそのほぼ中央部分にあたる。

本遺跡では、これまでの発掘調査で、縄文時代早期や前期の遺物を伴った落穴や集石遺構などが検出されており、縄文時代の人々の生活の痕跡がうかがえる。

本遺跡周辺の遺跡には、谷を隔てた西側の台地上に縄文時代から古墳時代にかけての伝右衛門遺跡や近藤障子遺跡があり、また谷を隔てた南側には縄文時代から平安時代の遺物を有する小袋遺跡がある。さらに目を南方に向けて、古墳時代の遺跡である苗木遺跡・北近藤第一地点遺跡・南近藤遺跡があり、特に北近藤第一地点遺跡からは住居址が多数検出されている。

このように、近藤沼を取り巻く地域には、縄文時代から古墳時代にかけて数多くの遺跡が所在しており、当時は生活適地であったことがうかがえる。

調査の概要

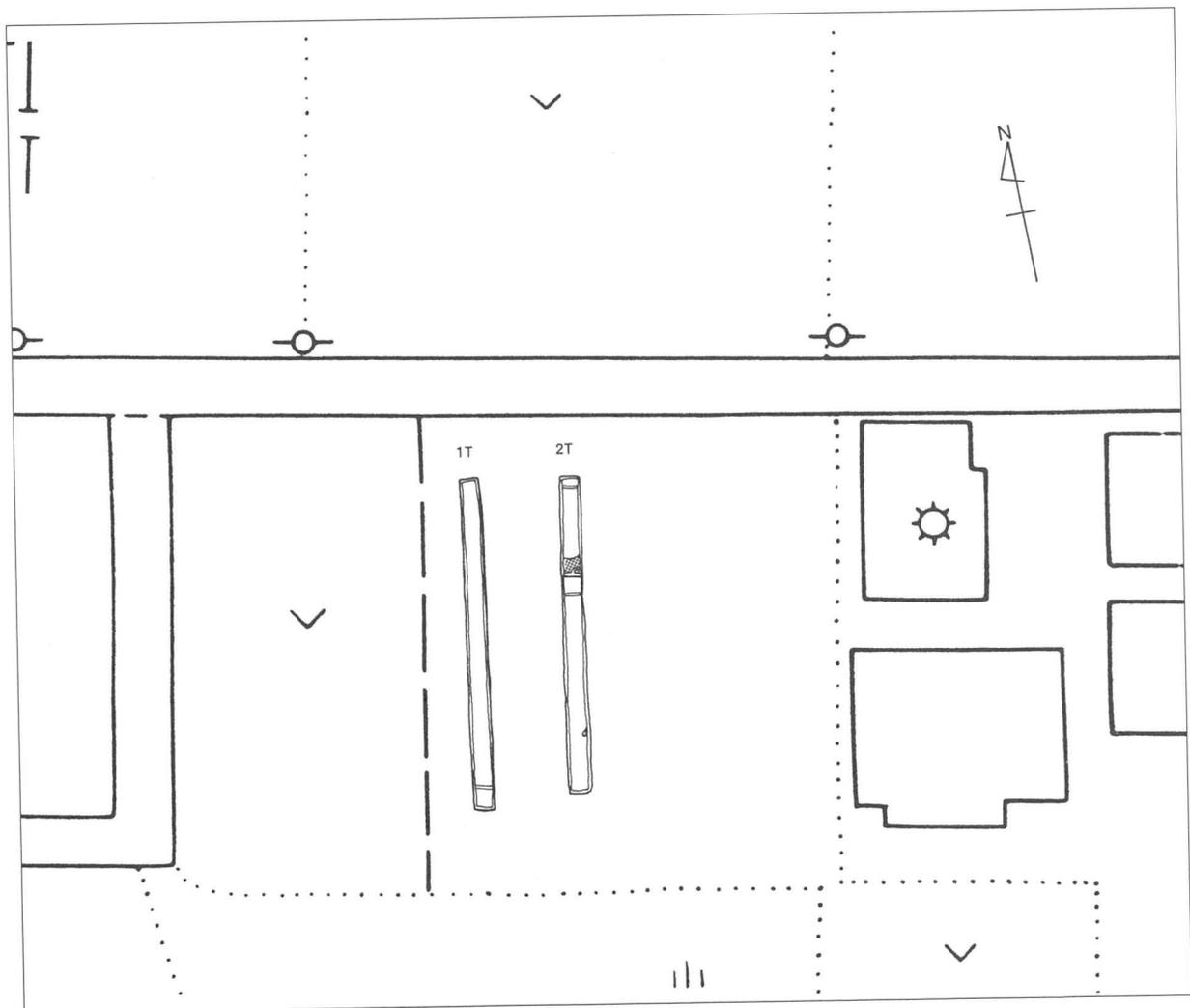
北小袋遺跡（平18地点）の発掘調査は、工事予定区域の地形に合わせ、南北方向に2本のトレンチを設定し、土木重機により表土排除を行った。表土以下の土は土層断面の観察を行いつつ人力で掘り下げ、遺構・遺物の確認・検出を行った。

土層は、現地表面から約20～40cmでローム漸移層となり、約40～60cmの深度でローム層が確認された。調査地はほぼ平坦である。

今回の調査で、2トレンチ北側と南側で時期不明の土壌状の落ち込みを計3基検出したが、その性格などは明確にできなかった。また、両トレンチの中央部で近年の掘削による攪乱が見られた。

調査区内では遺物の出土はなかった。

今回の調査において、保存の対象となる遺構等の確認はできなかったことから、調査区域における開発行為に対して埋蔵文化財への影響はないものと判断した。



第7図 トレンチ配置図（1：400）

3. 子ノ神1遺跡



第8図 子ノ神1遺跡 (1:5000)

所在地

館林市上赤生田町字新田4072-2、
4073-1、4077、4079-2

調査原因 大型店舗建設

調査期間

平成18年12月3日～平成19年1月4日

調査面積 4,884m²

遺跡周辺の環境

子ノ神1遺跡は、東北自動車道館林インターチェンジの西方約2km、館林市街地の南方の田園地帯に位置する平安時代の遺物の散布が見られる遺跡である。

邑楽・館林台地の南辺は浸食が進んでおり、台地の南側を東流する谷田川からの細長い支谷が深く台地に入り込んでおり、その地形の概観はちょうど手のひらを広げた様な状況を示す。

子ノ神1遺跡は、谷田川から北西方向へ延びるこうした細長い谷頭を南に望む洪積台地のやや張り出した部分に所在し、細長い谷に面して北西に長く広がっている。今回の調査地は遺跡の西側部分にあたる。

周辺の遺跡としては、同じ台地上の南方に山東遺跡、西方の支谷に沿って志柄1遺跡や赤生田中島遺跡といった平安時代の遺物を散布する遺跡が本遺跡同様細長く広がる様子を呈して所在する。また、北東には子ノ神古墳(推定)が所在する。遺跡周辺には田園風景が多く残るが、近年国道に沿って開発が進んできている。

本遺跡の調査はこれまでに例がない。

調査の概要

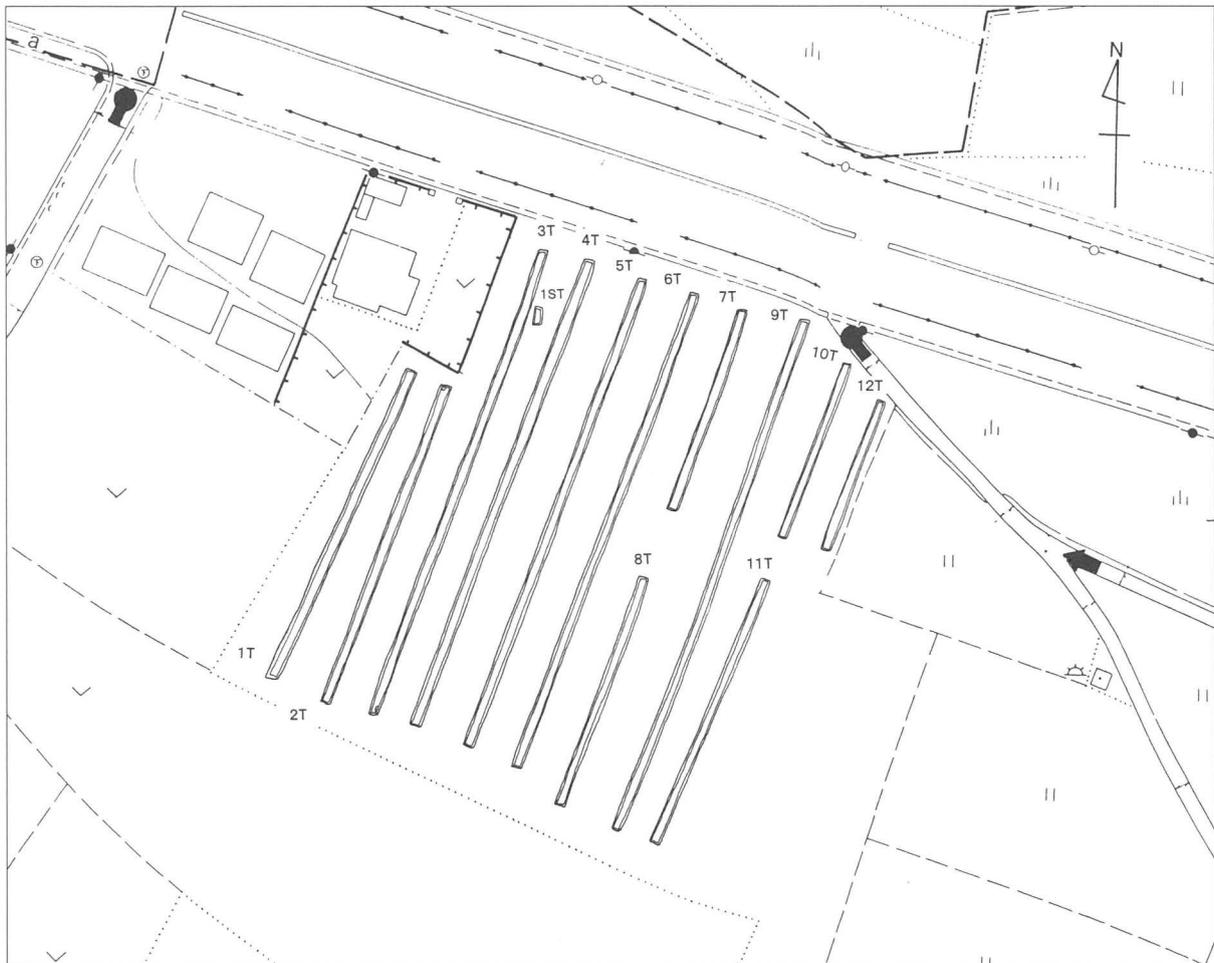
子ノ神1遺跡(平18地点)の発掘調査は、工事予定区域の地形に合わせ、南北方向に12本のトレンチを設定し、土木重機により表土排除を行った。表土以下の土は土層断面の観察を行いつつ人力で掘り下げ、遺構・遺物の確認・検出を行った。

調査区域における現地表面からローム層までの深度は、1トレンチ側で20~30cm、5~6トレンチで20~30cm、10~12トレンチで20cm程であった。また、調査区は北から南へ緩やかに傾斜しており、比高差は25cm程であった。1トレンチ南端ではわずかに地下水の湧出が見られた。

今回の調査で、2トレンチ北側と4トレンチ南側で時期不明の土壌状の落ち込みが各1基検出された。このうち4トレンチ南側の土壌内部からは細かい炭化物が出土したが、その性格などを明らかにすることはできなかった。ほとんどのトレンチにおいて耕作機械または土木重機によるものと思われる掘削痕や攪乱が多く確認された。

遺物の出土は少なく、土師器の小破片がほとんどであった。

今回の調査において、保存の対象となる遺構等の確認はできなかったことから、調査区域における開発行為に対して埋蔵文化財への影響はないものと判断した。



第9図 トレンチ配置図(1:1000)

4. 八方遺跡



第10図 八方遺跡 (1 : 5000)

所在地

館林市足次町字八方2850-1、
2865、2866-1

調査原因 道路拡幅・側溝

埋設工事

調査期間

平成19年1月25日～1月26日

調査面積 150m²

遺跡周辺の環境

八方遺跡は、館林市の北部、東武鉄道佐野線「渡瀬」駅の西方約0.5kmに位置し、渡良瀬川の沖積低地に突出する舌状台地上に所在する古墳時代から平安時代にかけての遺跡である。

本遺跡のある台地は、現在の市街地をのせる邑楽・館林台地から北の渡良瀬川沖積地に半島状に延びる、幅約150mの馬背状の舌状台地で、台地の西と東は渡良瀬川が形成したと考えられる沖積地で囲まれている。現在の沖積地との比高差は約2mである。

今回の調査地は舌状台地の北端、遺跡の最も北側に位置している。周辺の遺跡は、沖積地を隔てた西側台地上に縄文時代から古墳時代の住居址や土器片が確認された岡野・屋敷前・岡遺跡がある。また、南側の邑楽・館林台地の北斜面には縄文時代から平安時代の遺物を散布する大街道遺跡や縄文時代の遺物を散布する朝日町遺跡があり、南方には愛宕神社古墳（推定）が所在している。

本遺跡はこれまでの発掘調査で、古墳時代の住居址が多数検出されており、古墳時代を中心とした集落跡であることが判明している。こうした住居址や大型有段遺構等の主要な遺構は、舌状台地の中央部から斜面にかけて検出されており、本遺跡の中心は舌状台地の中心部にあるものと考えられている。

調査の概要

八方遺跡（平18地点）の発掘調査は、工事予定区域の地形に合わせ、3本のトレンチを設定し、土木重機による表土排除が困難な状況であったため人力でローム面まで掘り下げ、遺構・遺物の確認・検出を行った。

調査区域における現地表面からローム層までの深度は、1トレンチで約35cm、2トレンチで約15～50cm、3トレンチで約15cmであった。また、調査区は南から北へ急傾斜しており、市道を挟んで1・2トレンチと3トレンチとの高低差は180cm程あった。

今回の調査では遺構の出土はなかった。2トレンチは広範囲にわたり攪乱されており、以前の道路工事等による可能性もある。

出土した遺物は微量で、土師器の小破片と陶磁器片であった。

今回の調査において、保存の対象となる遺構等の確認はできなかったことから、調査区域における開発行為に対して埋蔵文化財への影響はないものと判断した。



第11図 トレンチ配置図（1：400）

参考文献

戸沢充則編『縄文時代研究事典』 東京堂出版 1994

(財)群馬県埋蔵文化財調査事業団編『群馬県遺跡大事典』 上毛新聞社 1999

館林市教育委員会『館林市の遺跡』（館林市埋蔵文化財発掘調査報告書第18集）1988

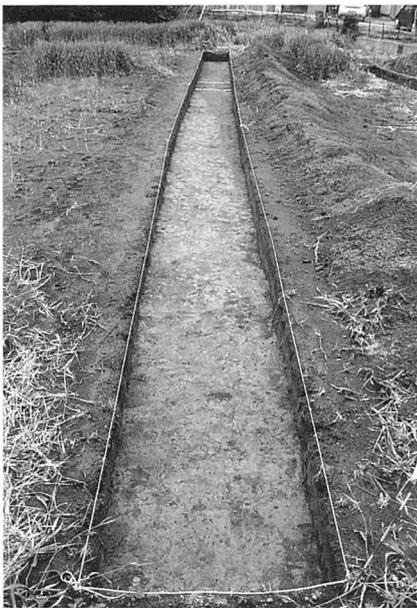
写真図版 1 (中堤遺跡)



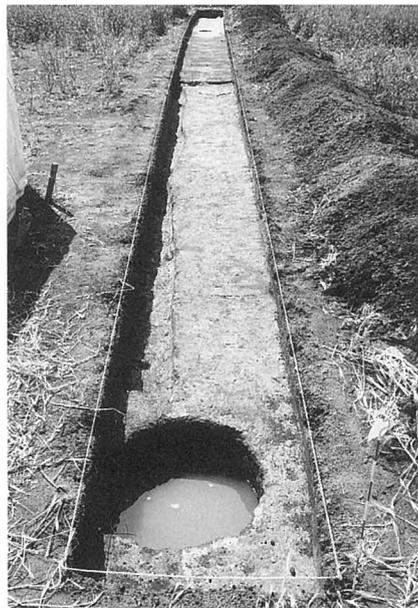
1-1 調査地 (北より)



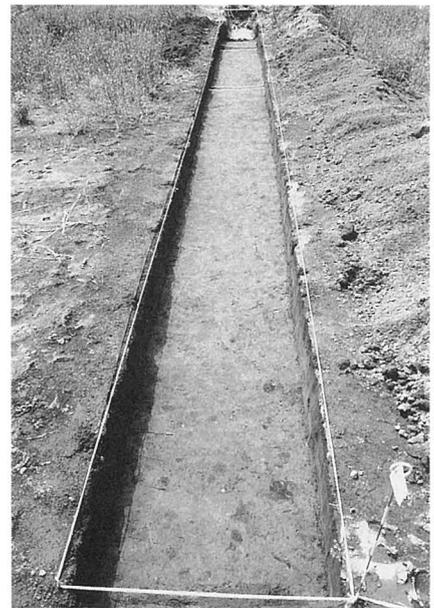
1-2 重機掘削



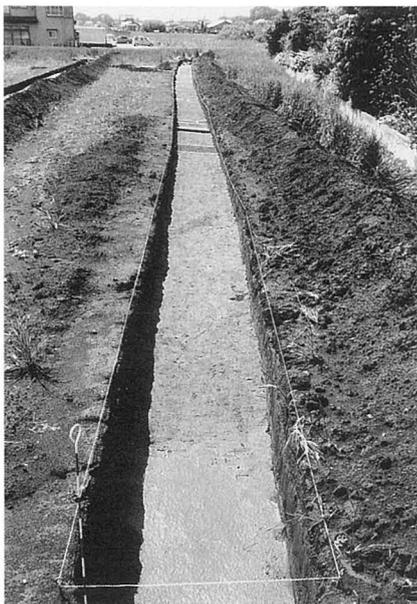
1-3 2トレンチ (東より)



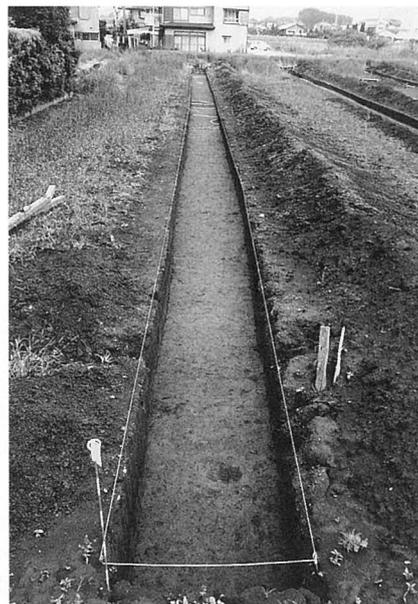
1-4 4トレンチ (東より)



1-5 7トレンチ (東より)



1-6 8トレンチ (東より)

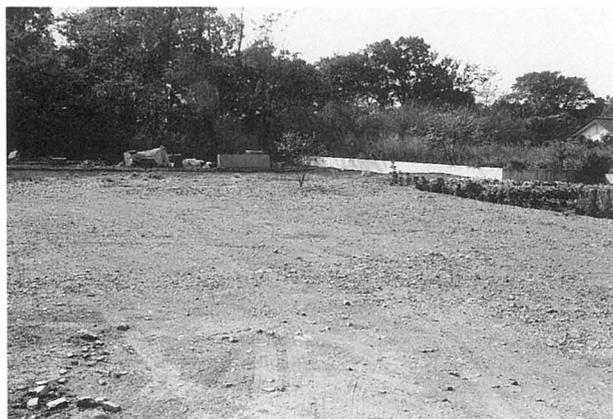


1-7 10トレンチ (東より)



1-8 14トレンチ (東より)

写真図版2 (北小袋遺跡)



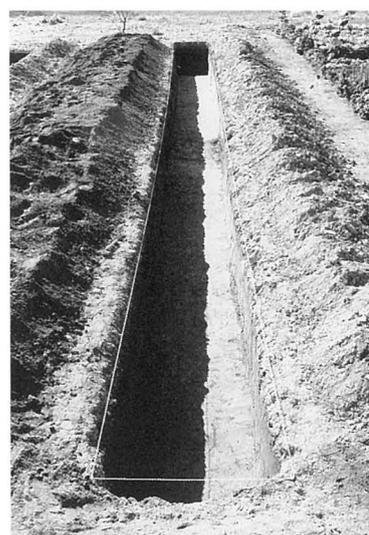
2-1 調査地 (南より)



2-2 重機掘削



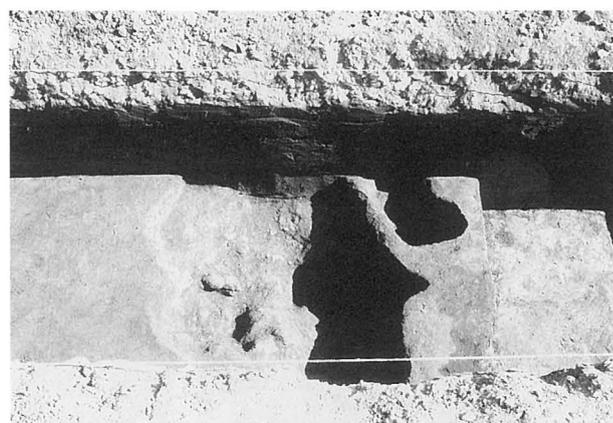
2-3 作業風景



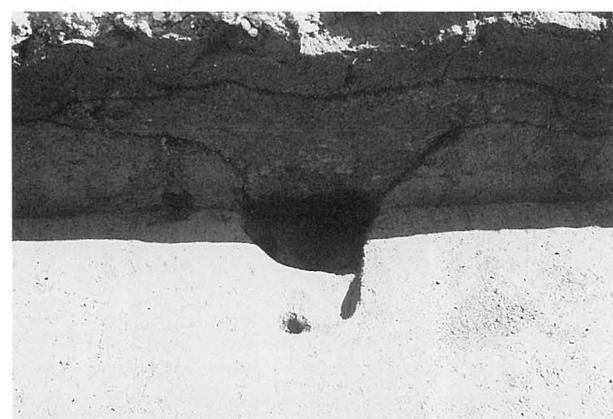
2-4 1トレンチ (北より)



2-5 2トレンチ (北より)



2-6 2トレンチ 土壌1・土壌2 (西より)



2-7 2トレンチ 土壌3 (西より)



2-8 重機埋戻

写真図版3 (子ノ神1遺跡)



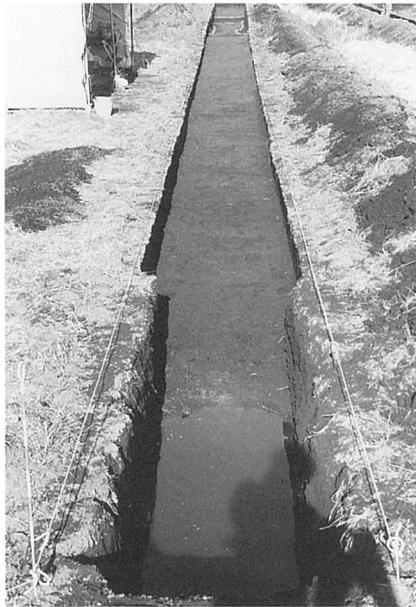
3-1 調査地 (北より)



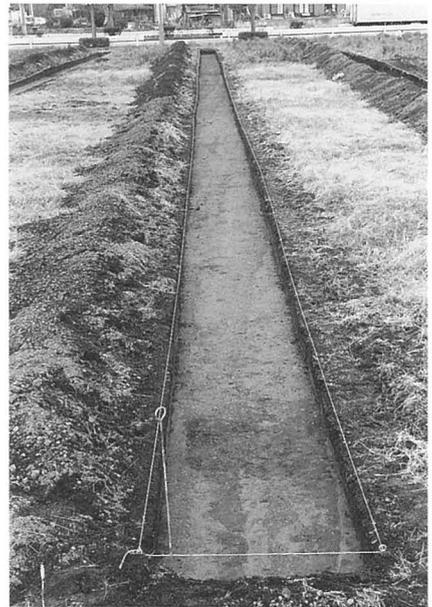
3-2 作業風景



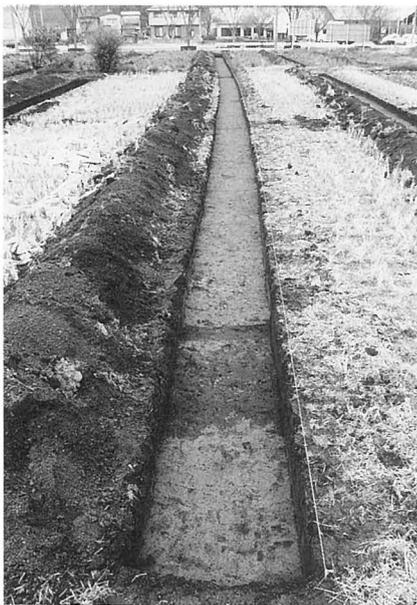
3-3 重機掘削



3-4 1トレンチ (南より)



3-5 5トレンチ (南より)



3-6 9トレンチ (南より)



3-7 10トレンチ (南より)



3-8 12トレンチ (南より)

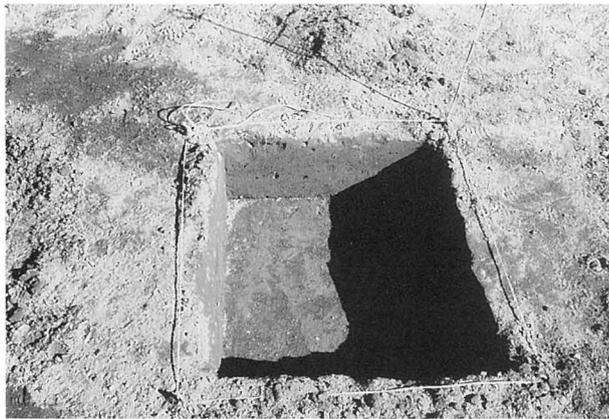
写真図版4 (八方遺跡)



4-1 調査地 (西より)



4-2 作業風景



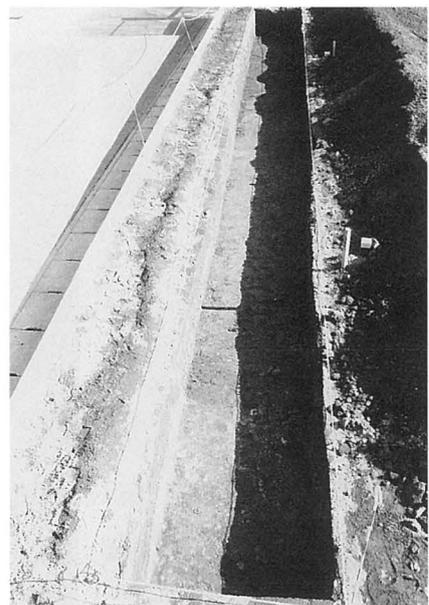
4-3 1トレンチ (南より)



4-4 3トレンチ (東より)



4-5 2トレンチ (東より)



4-6 2トレンチ (西より)

報 告 書 抄 録

ふりがな	たてばやししないいせき はくつちょうさ ほうこくしょ						
書名	館林市内遺跡発掘調査報告書						
副書名	平成18年度各種開発に伴う埋蔵文化財調査	巻次	—————				
シリーズ名	館林市埋蔵文化財発掘調査報告書	シリーズ番号	第43集				
編集者名	荒川博一	編集機関	館林市教育委員会				
編集機関所在地	〒374-0018 群馬県館林市城町3番1号						
発行年月日	2007(平成19)年3月31日						
市町村コード	10207						
所収遺跡	所在地	遺跡番号	北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
中堤遺跡	諏訪町字中堤	100	361334	1403123	20060517~20060610	7,206.17m ²	店舗
北小袋遺跡	近藤町字北小袋	54	361404	1403048	20061106~20061116	314.05m ²	個人住宅
子ノ神1遺跡	上赤生田町字新田	124	361345	1403309	20061203~20070104	4,884m ²	店舗
八方遺跡	足次町字八方	18	361527	1403209	20070125~20070126	150m ²	道路
遺跡名	種別	時代	主な遺構		主な遺物		特記事項
中堤遺跡	包蔵地	平安	井戸・溝・土壇 (時代不明)		縄文土器片・土師器片・石器		慎重工事
北小袋遺跡	包蔵地	縄文	土壇3基 (時代不明)		なし		慎重工事
子ノ神1遺跡	包蔵地	平安	土壇2基 (時代不明)		土師器片・陶磁器片		慎重工事
八方遺跡	包蔵地	古墳~平安	なし		土師器片		慎重工事

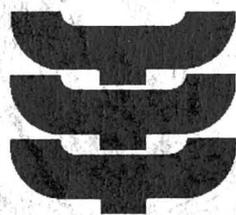
館林市埋蔵文化財発掘調査報告書 第43集

館林市内遺跡発掘調査報告書

— 平成18年度各種開発に伴う埋蔵文化財調査 —

編集・発行 館林市教育委員会 文化振興課 文化財係（館林市文化会館内）
〒374-0018 群馬県館林市城町3番1号 電話0276-74-4111
印刷 朝日印刷工業株式会社
発行年月日 平成19年3月31日

© Tatebayashi City Board of Education 2007 Printed in Japan



文化財愛護シンボルマーク

<http://www.city.tatebayashi.gunma.jp/bunka/>